

(様式6)

2025 年 10 月 29 日

令和7年度博物館専門職員等在外派遣事業実施報告書

文化庁次長 殿

住 所東京都文京区千駄木-22-30

氏 名 齊藤 有里加

令和7年度博物館専門職員等在外派遣事業の実施結果について、下記のとおり報告します。

1 派遣期間 2025 年 10 月 10 日（金）～10 月 16 日（木）

2 派遣概要

（1）派遣先名称

ノルウェー科学技術博物館（Norsk Teknisk Museum）

所在地：オスロ（ノルウェー王国）

会議名：Artefacts 2025（テーマ：Care and Repair）

（2）派遣内容

本派遣は、国際学会 Artefacts 2025 に参加し、初日セッション

「Communities」において研究発表を行うとともに、他国の保存・修復・展示に関するセッションへの参加を通して、博物館における「ケアと修理」の最新動向を調査したものである。

また、欧州・北米の研究者および学芸員との意見交換を実施し、将来的な研究交流を行った。

併せて、会場館であるノルウェー科学技術博物館の展示を視察し、水力織機による繊維産業、木材加工、石油開発、医学、物理化学資料等、幅広い産業技術史資料の収集・展示状況を調査した。

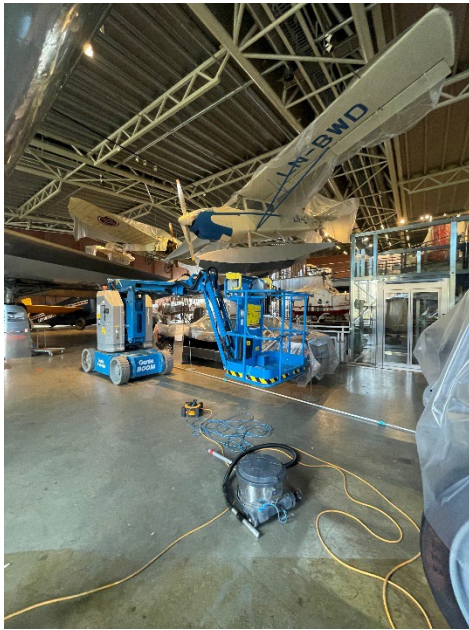


写真 1 ノルウェー科学技術博物館



写真 2 ワークショップラボ(目的別に館内数か所にある)

(3) 派遣成果

①発表概要

発表題目：

Innovative Simplicity: Participatory Care of Gara-Bo Spinning Machines and Their Legacy

本研究は、明治期に発明された国産紡績機「ガラ紡」を対象にワタの栽培からガラ紡機の維持までを対象とした参加型実践を通じて、「つながりとしてのケア (Care as Connection)」を考察するものである。ガラ紡機を人・モノ・制度を媒介する「バウンダリー・オブジェクト」として捉え、機械知識を持たない者も関与可能なケアの実践を提示した。資料への関与が単なる修理行為に留まらず、「育む」「関わる」行為として再定義され得ることを示した。

②討論・交流成果

来館者や市民が関与する保存実践の意義について活発な議論が行われた。理工系資料や医学資料など、多様な対象を通して「ケア (Care)」「リペア (Repair)」の概念を再定義する潮流が明確化された。

資料を単なる保存対象ではなく、社会・倫理・未来技術と結びつく「知のインフラ」として位置づける視点が共有された。

考察

日本における文化財行政は、歴史資料や美術工芸資料を中心に発展してきたが、理工系資料や科学技術資料に関する体系的支援は依然として不足している。AI化・デジタル化が進展する現代社会において、これらの資料群が示す「技術の思想」や「人間と機械の関係性」を理解・継承することの重要性が改めて確認された。また、理工系資料は「動かして見せる」「消耗・劣化を内包して維持する」といった特性を持つことが再認識された。各国の事例として、ノルウェー航空の航空機の保存判断、ドイツの大型コンピュータコレクション、ノルウェーの歴史的船舶資料など、保存困難なコレクションへの多様な取り組みが紹介された。

さらに、宇宙服など先端技術資料の保存科学についても注目すべき議論があった。宇宙服は、ナイロン・ポリウレタン・金属繊維など異種素材の複合体であり、加水分解・硬化・層間剥離などの劣化要因を内包する。保存環境制御やケースの導入、デジタル複製・3D スキャンによる代替展示など、「物質の持続可能性」と「記録・再現の倫理」の両立が課題として共有された。このような宇宙開発関連資料の保存科学的検討は、理工系コレクションの中でも特に、未来志向の保存——すなわち、資料を単に現状維持するのではなく、未来にどのような形で伝えるかを考えた保存のあり方——を象徴する事例として位置づけられるといえる。

医学資料については、倫理的観点からの保存・展示方法が議論され、特にノルウェー科学技術博物館併設国立医学博物館での実践（解剖学資料・義足・義眼の展示、脂漏性ミイラの活用など）は示唆に富むものであった。

「死とは何か」を問い直す展示構成や、人工呼吸訓練モデル「ANNE」に関する展示は、「死と生をつなぐ」教育的・倫理の実践として高く評価された。

Artefacts ネットワーク全体としては、資料の物質的・概念的力を再認識し、未来社会への継承をめぐる多角的議論が展開された。

ここでいう「物質的・概念的力」とは、資料やモノが人々の思考や行動に働きかけ、新たな理解や価値を生み出す力を指す。すなわち、資料を単なる受動的な保存対象ではなく、来館者や研究者との関係性を通じて社会的意味をつくり出す能動的な存在（アクター）として捉える視点である。日本の博物館界においても、資料の知的価値と実在性を基盤とした戦略的研究と国際連携の推進が求められることを確認した。



写真 3 デスマスクと人工呼吸訓練モデル



写真 4 各博物館近況紹介の時間



写真 5 博物館前での記念撮影

（４）成果の活用計画

帰国後、所属館および関連学会（科学史・技術史分野）で成果報告を実施予定。今後、さらに博物館実践に応用し、来館者と資料をつなぐプログラム設計に反映させる。

（５）その他

航空：フィンエアー（成田-ヘルシンキ-オスロ往復）

宿泊：Radisson Blu Hotel Nydalen, Oslo（10/11～10/15）

派遣中の活動は安全かつ円滑に実施し、予定通り全プログラムに参加。